

日本東亞同文書院編

(第四十五冊)

中國省別全志

綫裝書局

图书在版编目 (C I P) 数据

中国省别全志:全 56 册:中文、日文 / 日本东亚同文书

院编.--影印本.--北京:线装书局,2015.4

ISBN 978-7-5120-1778-8

I. ①中… II. ①日… III. ①地方史—史料—中国—
1907 ~ 1918—汉文、日文 ②地方史—史料—中国—1941
~ 1949—汉文、日文 IV. ①K29

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2015) 第 048917 号

中国省别全志

主 编

日本东亚同文书院

责任编辑

赵 鹰

出版发行

线装书局

地 址 北京市西城区鼓楼西大街四一号

邮 编 一〇〇〇〇九

电 话 六四〇四五二八三

网 址 www.xzhbc.com

三河友邦彩色印装有限公司

一一三四〇千字

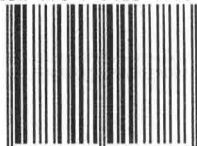
二〇〇〇

二〇一五年四月第一版第一次印刷

四〇套

四二〇〇〇元 (全五十六册)

ISBN 978-7-5120-1778-8



9 787512 017788 >

第四十五冊

第四卷 貴州省（上）（二）昭和十八年 一九四三年 東亞同文會……………一

貴

州

省

（上）

（二）

昭和十八年

一九四三年

東亞同文會

第四卷

貴
州
省

(上)
(二)

昭和十八年

一九四三年

東亞同文會

貴

州

省

(一)

(二)

策四卷

東亞同文會

一、四、三、五

四、五、八、九

第三編 都市

第一章 總說

本書第一編自然環境に於いて既述せるが如く、貴州省は支那大陸の西南部に位する僻遠の地にして雲南省と共に雲貴高原を形成し、東は湖南省に、北は四川省、西は雲南省に、南は廣西省によりて圍繞せられ、地勢亦高峻にして省内は苗嶺、武陵及び婁山の諸山脈全省に連亘して重疊たる山嶽が起伏してゐる。また西南支那の大河は多くその源を貴州省に發し黔江、清水江、赤水江、榕江、盤江等省内を流るゝも、何れも地勢高峻、山岳重疊せる間を流れ、流勢過激にして、下流省境附近に於いて多少の舟利あるを除きては、殆ど水運の便に恵まれず、陸路の交通も亦重疊たる山嶽に阻まれ極めて不便である。斯くて地勢交通の不利は貴州省に禍すること多く、従つてその文化・産業の開發は久しく等閑に附せられ、全國第一の貧省と烙印せられてゐる。尤も資源調査の未だ行届かざる今日、その將來の繁榮如何は尙ほ之を未知數とするも現實の狀態は「天無三天晴、地無三里平、民無三分銀」と謂はるゝ貴州俚諺が如實にその貧相を物語つてゐる。而して貴州省の先住者は苗民その他の所謂蠻夷であつて、それ等蠻夷を平定して漢人の移住を見たるは近く明代以後に屬し、貴州開拓の歴史は極めて淺い、従つて

省内に於ける各都市は多く蠻夷を驅逐せる跡に建設せられたる鄉鎮の發達せるものに過ぎず、都市居住者も亦殆ど漢人のみにして、都市人口の如きも貴陽市の約一二三、〇〇〇人を筆頭とし、省内縣城八四を算するも、安順、遵義、鎮遠及び都勻等が、それ／＼黔西、黔北、黔東、並びに黔南地方に於ける中心都市として繁榮せるを除きては、多くは數千の住民を有するに過ぎざる部落的都市にして支那人の所謂「全國中最貧弱の省區」である。殊に貴州省の地理的特徴は、他地方より隔離せられて、多くは一縣を形成してゐることであり、更にまた省内山嶺を以て圍まれ、小高原多く、これ等の小高原が地形・氣候等の自然地理的要素を主體として常に雲貴高原或は西南高原地帯の名を以て單元化せられ、省としての獨自性は極めて乏しく、省の四方を圍繞する雲南・湖南・廣西・四川各省との關係に於いて常に隨伴的存在に終止してゐる點に在る。従つてまた貴州は貴州として立つ能はず、周圍の諸地方中何れか強大なる地方に抱擁せられて來たのであつて、讀史方輿紀要に「貴州の地、唐・宋以來中國に通ずるもの十分の一、二に過ぎず、元人始めて起り之を疆理す、然れども大抵羈縻異域に同じくして未だよくその草昧の習を革むる能はず」云々と述べてゐる所以であるが、而もこれ等の關係は敢へて往時を問はず、今日に於いても尙はその然るを見るのである。即ち貴州省が省としての獨自性を有せざることは、その方言に於いても、之を發表し得るのであつて、坂本一郎教授の貴州方言（本書第一編第三章第五節）に就いて見ても、同教授の記述せらるゝが如く、北部遵義方面は四川方言に近く、西部盤縣方面は雲南方言に、東部鎮遠方面は湖南西部方言に近似し、また南部獨山方面は廣西北部方言に近き等省内各地方言の近似關係は地理的近親關係に平行してゐる。

また、支那に於ける都市分布の状態は、人口五萬以上の都市數一五九中、西南高原地域に屬する雲南・貴州兩省に於いては五萬以上の都市 四・一〇萬以上の都市三・合計七都市にして、而もその大部は雲南省内に在り、貴州省に屬するものは、安順を加ふるも、僅かに二都市にして遼義は五萬に滿たず。一〇萬以上の都市は省都貴陽を數ふるのみである。

而して近年に至りても貴州省は天賦に恵まれず、明代末期より清代に亙る長年の間、蠻夷の叛亂平定の後を受けて徐々に漢人の移住を促し、自然的障礙を排除しつゝ漸次資源開發の態勢を整へ來りしも、これ等貴州省民の頭上に突如として降り注がれたるは民國十四年より翌年秋にかけての大災害である。即ち軍閥の抗爭による大戦亂、共產軍の侵襲、土匪の跋扈、加ふるに稀有の大凶作等重なる災害のため都市鄉村は共に掠奪破壊を撞にせられ、當時米價一〇〇斤三〇元といふが如き殺人的相場を現はし、饑孚流氓は山野に溢れ、甚だしきは相争ひて死者の肉を喰ひ、街衢路上に餓死する者六〇萬、流離する者一〇〇萬に達せりと傳へられ、都鄙共に死の街と化したが、之がため都市の多くは全く荒廢化するに至つた。當時貴州省を旅行せる東亞同文書院學生が、その生々しき慘禍を記録せるものに據り考ふるも、災害の如何に激烈なりしかを推知し得るのである。従つて貴州各都市はこの時期に於いて著しくその發展を阻止せられ、今や將に再出發の途上に在りと謂ひ得る。

また貴州省は人口約一、〇四八萬人にして、その中、漢人約九〇四萬人、他は蠻夷である。而してこれ等漢人は鄰省との關係上、省境附近即ち東部は湖南人、北部は四川人、西部は雲南人、南部は廣西人の移住せるもの多く、各都市皆それ／＼鄰接各省の風味が多分に盛られてゐる。且、これ等の都市は邊疆各省に於けると等しく縣

城即都市にして、一市、八四縣城に分たれ、皆その地方に於ける政治經濟の中心を成すも、大部分は、農業都市である。但し近時公路建設の進捗發展により漸次新興都市出現の氣運が醗酵せられつゝあることは看取することが出来る。

備考 貴州省の縣市行政は第二編に於いて記述せられたるが如く、張肖梅の貴州經濟（民國二十八年版）その他に據るに一市八一縣に區劃されてゐる。而して民國二十一年中、金沙、納雍及び道真三縣治の新設を見、金沙は黔西縣より分治し、打鼓新場に縣治を置き、納雍は大定縣より分治して大定場（現大定）に縣治を、道真是正安縣より分治し土溪場（現土溪）に縣治を置いたが故に、之により貴州省内縣市行政區劃は一市八一縣となつたものと思はれる。然るにその後、民國二十四年省行政督察區を新設して、一一督察區とし、二十五年八區に改め、更に二十六年に至りて六區に更めたが、何れも縣行政は八一縣に區劃されてゐる。殊に民國二十八年版貴州經濟に於いても八一とせらるゝ所より察するに幾度かの行政制度の變革中に於いて前記の金沙・納雍・道真の新設三縣の改廢を見たものと推定せらるゝも、公報に據り之を確證し難きが故に本編都市に於いては前記三縣をも縣治として記述することとした。

貴陽市街圖





第二章 省都 貴陽市 (KWEI-YANG)

第一節 位置・沿革及氣候

貴陽市は貴州省の略ぼ中央部、貴山の南に位置し、貴陽の名之より出づと謂はる。烏江の上流である清水江北岸の支流南明河に跨がり、重慶の南西九三五支里に位する省都である。漢代且藍縣の地にして、梁以後蠻地に没し、隋代には牂牁郡と爲り、唐代牂州とし、五代の時、八番の地となつたが、宋代には大禹谷樂總管府を置き、元代順元路として貴州等處長官司を置いた。その後明初に至りて程番府とし、次いで隆慶年間この地を貴州省城として貴陽府と改め、清代更に貴筑縣を併置したが、民國に至り、地方行政組織の變革を見るや、府を廢して貴陽縣と改め黔中道の道治とした。民國十九年八月貴陽市と改組し省政府の直轄とした。

第二節 人口及市街概況

第一 人口

貴陽市は戸數二一、五八四戸、人口一二三、〇一八人を算し、貴州省政府の所在地にして本省中部の平原に在



貴陽城門

り、全省陸路の樞紐たると共に、政治經濟の中心であるが、周囲は山嶺に圍繞せられ全國最小の省都である。

第二市街

一、概況

貴陽市は海拔一、〇九五米、貴州高原の中央に位し、北黔靈の諸峯に枕し、南に南明河の水を環らし、扶風、棲霞、相寶、獅子の諸山は東西に聳峙してゐる。城郭は南北に互りて長き楕圓形をなし、高さ二〇尺、厚さ一〇尺、馬踏八尺、六廣、紅邊、新東、老東、大南、次南、大西及び威清の八城門を有する城壁を以て圍繞せられ、周圍二〇支里に達してゐる。

この地は従前、老城（南）と新城（北）とに分たれ、老城北門により二城を連絡してゐたが、民

國十七年秋、北門及び兩城を隔つる城壁を撤去すると共に、市區の改正を爲し城内を一區劃とした。城内は即ち官衙、公署、商舖相集まりて政治・經濟の中核を成し、城外は工業地域を形成してゐる。

城内街路は南北を縦貫する四線並びに東西に横貫する四線の主幹街路を中心として縱横に通じ、城外街路は城壁に沿うて建設せられた環城馬路を中核として各地に公路を放射すると共に、街道もまた四方に通じ、咸清門と大西門との中間に在る寅興里には各公路を運行する長距離自動車の停車場が設けられてゐる。

河川は城内を南北に貫流して南明河に注ぐ貫城河と城外西南部城壁に沿うて南流する南門河及び大南門外を東流する南明河とがある。貫城河は即ち城北より南流して六廣門の水關より城内に入り、普陀橋、通商河、六洞橋を経て城外に出で南明河に合流し、南門河は城郭の西南方より流下し來たり次南門外の兩江口にて南明河に合流してゐる。また南明河は清水江西岸の支流にして貴陽の西南廣順縣下の燕族關附近に水源を發し、東北流して貴陽大南門外を經、清水江に注いでゐる。貴陽城外を流るゝ南明河はその沿岸に道院禪林多く疏開密樹は綠水青山と相俟ちてその景觀貴陽最佳の地であるが、水淺く河身狭くして僅かに精米用水車に利用せられてゐるに過ぎない。

二、街 衢

市街を縱横に連絡する街路は、三等に分たれ、その幅員一等路は四四尺、二等路は三六尺、三等路は三〇尺である。而して城内を縦貫する街路は、中央部を貫通する中央第一幹線を一等路とし、この街路は城北六廣門外環城馬路の洗爵塘を起點とし、北大路、南京路、廣東路、西成路、中華路、南華路、鹽行路を経て大南門を出で南

明橋を過ぎりて環城馬路の箭道街に至るものにして、廣東路より中華路に至る間は貴陽第一の繁華な街衢を成し大商舖栞比して洋式の大廈高樓多く商業薈華の地區である。

北大路は貴州省北部地方よりの貨客入城の街衢であつて、旅館、夫行多く、南京路には砂糖、麻、菜油、雜穀高集まり、廣東路には綿糸布商、西成路には金屬商、絨商、藥材商、料理店、茶館等多く、獨商謙和洋行も亦この街衢に在つた。

西成路と中華路との中間は、北門を撤去して建設せる圓形の廣場を成し、その中央には前貴州省主席周西成の銅像があつてこの廣場を銅像臺と名付けられてゐる。中華路、南華路は東西南北各幹線の交叉點にして綢緞、洋衣雜貨、京果、海產食料品、磁器、筆墨、貴金屬、顏料、藥材、毛皮商等集まり「車擊鼓、人摩肩」の區にて最も殷賑な街衢であり、商務印書館、新友書店、交通書局等の書籍商もこの街衢に在る。鹽行路には數十店の鹽商麁を並べ、南華路に鄰接する地域には藥材、紙、綿糸布、その他軍需品等の取扱商が多い。

而して縱貫第二、三、四幹線は中央第一幹線と平行し、二等路にして、各路線共皆、その北端は環城馬路を起點とし、南端は大南門に螺集して居り、第二、三幹線は中央幹線の右側に、第四幹線はその左側に在る。

縱貫第二幹線は紅邊門外の環城馬路を起點とし、和平路、靈光路、老古巷、亞元坊、遼水關、螺絲灣、珠湖井新街、金井街、福德街、倉後街を経て大南門に至るものにして、和平路には廣大なる地域を占むる北天主堂及び附屬の學校、醫院、花園があり、老古巷、亞元坊、螺絲灣一帶には住宅多く、珠湖井に入り初めて商舖散在し、新街には毛織物商、金井街には刺繡、菓子、靴商、福德街には家具商、寫眞店、倉後街には麵商、醬油商等が多

く、金井街口の舊省議會跡には貴州省黨務指導委員會が在る。縱貫第三幹線は紅邊門右側の靈光路より起り、天主堂花園の北側にて分岐し、余家巷、三官殿、大堰塘坎、縣學宮、大廟子、蔡家房、双槐樹、會文路、順城街を経て大南門に達し、余家巷、三官殿、大堰塘坎は皆住宅地にして庭園の優れたるもの多く、陳園は余家巷に、唐園は大堰塘坎に在り、亭榭の清幽、水木の明瑟を以て知られ貴陽名所に數へられてゐる。縣學宮には女子中學校、大廟子には女子師範學校が在り、蔡家房、双槐樹、會文路、順城街は皆住宅、商舖相混り街路に面する地域には雜貨、食料品等の小賣店、裁縫店が多い。

縱貫第四幹線は中央第一幹線の左側を走るものにして、その北端は環城馬路の西北角より城内に入り、樂羣路、岩井街、水溝、龍泉街、四達井、太平橋、公園路、南通路を経て南折し、廣西路、馮家塘を経て大南門に達す。樂羣路には樂羣學校があり、岩井街、水溝一帶には小賣商多く、四達井の左側には世傑花園があり、また太平橋の東には總商會がある。中山公園は公園路の西に在り、清代按察使署花園の跡に設けられたものであつて、中央の池を環つて祭唐祠、夢草亭、池心亭等の亭榭が建てられ風緻佳く、池水は清澗を立て、夏季荷花の眺めは最も優れ、池の左側には圖書博物館及び光復樓跡がある。公園路口の第一橫貫線と交叉する地は甚だ繁華にして、二四工廠（貴陽模範工廠）はその右側に在る。南通路の北部は商家、南部は住宅多く、廣西路には學校、會館、祠廟が多い。

次に横貫幹線の第一・第三幹線は一等路にして、第二・第四幹線は二等路である。

横貫第一幹線は威清門外の環城馬路を起點とし、威西路、普定路、化龍橋を経て新東門を出で環城馬路に連絡